

二月作品

その一集



狩野 一男選

異国 の 授業

高 橋 みどり * イギリス

戻りたき国は世界の中心で咲き誇らずとも戦なき國
すりガラス越しにニュースを観るようで 祖國の地震、暴風雨、熊

パディントン、パーの生れたるこの国の野生の熊は絶えて久しき
ニッポンの代表のように日本語を語る怖さよ 異国 の 授業
大学院に園児がひとりの心地して留学、少し、疲れかけてる
主任さん、先生、みなさん、大家さん ファーストネームかごひですむ國

良 い 日 四 宮 詠 子 北海道

おかげりと声かけくる隣家人週末のみの在宅の吾に

京都より今日も夏日とライン来ぬこちらは暖房つけたと返す
町中に三日続けて熊が出ぬ歩いて四、五分ほどの近さに
幾たびも町に響くは熊追ひの銃砲の音 日暮れ険しく

熊 の 情 報

黒 沢 幸 子 岩 手

いつてらつしやい管理人の声に送られて札幌を発つ勤務地に向けて
夏長しと予報で言つてゐたけれどそれは内地のことだけらしき
頭にはいくつかの言葉ありたれど歌に成せずにひと日過ぎゆく
百八十キロ離れし町に住む次男に会ふことができた今日は良い日だ
日曜の朝はアンパンマンを見む子らが幼き頃よりの習慣

二 患 保 持 者

小野寺 政 賢 岩 手

「発作性頭位目まい症」に「帯状疱疹」語呂よき二患の保持者ぞ我は
「老老介護」知らずに逝きし古人か「人生わづか五十年」とは
わが家の両隣り家に熊現れて蜂蜜・玄米食ひ荒らされぬ
熊よけになるかと僕軒下に南部鉄器の風鈴吊す
ハウステンボス土産に孫に購ひし(テディベア)いま改めて見る
「そうじゃない、そうじゃないんだ」へべれけが独りごちてる終電の中

38

市役所の放送よりも友からのラインが早い熊の情報

県外から城跡訪ねて来し人のまづは問ひたり「熊出ませんか?」

「城跡より歩いてすぐの所にも熊が出ました」：本当の事

満足できる歌 大平勇次 * 茜城

熟年の夢追いかけた二十年過ぎてしまえば時は短し

裏庭の銀木犀の葉をたく秋雨の音湯船にて聴く

円安を誘導できてデフレから脱却できた理想の日本か

過ぎて来た人生はかなり長いけど満足できる歌一首なし

八十一過ぎたから店をやめました寿司屋のおかみさばさばと言う

次々と身の回りから従兄たち消え去りし夢現実となる

小島 なお選

火 事 村田淳子 * 埼玉

戸をたたく隣のもえかちゃんの声「おばちゃん火事だ！おばちゃん火事だ！」

消防車の音近づきてつぎつぎと太きホースが放水はじめる

火の元の左どなりの友の家を赫き大きな炎が襲う

七軒に火は広がりてしばらくは集会所にと声が聞こえる

秋祭り 滝口良子 神奈川



五十年のんびりくらすわが街に今年は泥棒被害もあいつぐ
スーパーのフェンスに絡まる忍冬右巻きか左巻きか見ながら帰る

すぐに止まつた 清水佑太郎 * 千葉

有給をとれば必ず起きること我が犬の急な体調不良

壁見れば尿の二滴が赤っぽく我が犬と五秒弱見つめ合う

日に三度から五度散歩していますうちの仔、膀胱炎になりまして
ロードスター・ファンミーティングを横目に見MAZDAと検索窓に入れる
九十九里浜はワンコに優しくてチーバくんの左腕良し
九十九里浜に我が犬駆けておりリードが切れですぐに止まつた

白壁 白井良子 神奈川

夫が挽ぎ下で受けとる富有柿陶器のやうでつるり冷たし

トランプが立ち寄る基地へ低く飛ぶ三角翼の爆撃機二機

赤黒き夕雲を見てトランプの核実験の唐突をおもふ

櫛の実を一つも見ない白神山の異常なる秋きこりは語る

もみぢする木のてつぺんのクマの子を酔酔の矢にて眠らし帰す

バカの壁、年収の壁、ことばの壁いろいろあれど白壁の美し

自治会の秋の祭りのビンゴ燃え（あきたこまち）が喝采を受く
秋祭りの気のなほ残る月曜日そとわたりくる金木犀の香
二つ三つ銀杏落ち葉をからませて角に葬送の案内板立つ
接骨医の前の花壇が均されて刺されて残るシャベル一本

遠富士にその身傾け動かざるクレーン今日は日曜日なり



垣の隅にうすべに色のコスモスを植ゑたる人の病むを聞きたり
草のいのち最も強しとおもはせて東海道に延びるくずの葉

母の家 荒川ゆみ子 東京

とのぐもる駐車場に虫が鳴く子だくさんの家のその跡
老ひとりさくら落ち葉に手を入れて何かひろへり月の出の頃

冬雲の動かぬあたり使はない布団が重なる母の家ある

真夜覚めて温き牛乳飲むと言ふ、母は母の母に会ひたくて

窓ぎはの青年の木は降る雨を知らずその葉にうす埃せり

今は家のポストの開け口の冷たさ思ひ出したり今朝は

風間 博夫選

働くクレーン

降旗宣子 東京

柿攻め

金平明義 新潟

五階より見渡す街のひととこころ大きクレーン立ち上がりたり
午前八時穂先ゆらりと伸び上がりクレーンは早働きはじむ
紅白にその身飾りで遠く立つクレーン今日も元気さうです
飛行場へ下りゆく小型機見送りて穂先ぐるりと返すクレーン
夕焼けの空よりゆるりとたたまれて朝のかたちに沈むクレーン

来夏こそ行くと応へてゐるものをおれを嘘つきにしてきみは亡し
濡れ落ち葉足に踏みつつきみからのメール途絶えて「一月が過ぐ
白杖に上つて下り左手に折れて上つてお薬師ここは
お薬師に参ること四千八百日八十四歳十日目けふは
人の名の出でぬくるしみ日々かよふお薬師様は助け賜はず

首都高と新宿副都心と多摩ニュータウンの整備に尽くしき山田正男は
東京の交通渋滞解消に都市高速道路を君は整備す

業務機能分散のため新宿に副都心整備を君は主導す
淀橋の浄水場を移転させ新宿副都心を整備せし君
千字との制限内に収まらず山田正男の評伝書けば

ゆるゆるするり

阿部直子 新潟

五年後のわれのすがたは霧の中国勢調査スマホで返す

除草剤撒きたる跡と撒かぬ跡 雀帷子まだらに残る

枕辺のロウソクの灯はLED線香あげずに手を合はせたり

ギンヤンマにかまれ逃がした敗北感 最後のあんパン先に買はるる
医師は言ふ「びんびんころりは難しい、ゆるゆるするりがおすすめです」と

秋の蚊が顔のまはりにまとひつきふはふはふはつと眉間に刺しぬ

首都高 古川公毅 東京

佐渡ヶ島から三河から高知から今年の秋は柿攻めに合ふ

伊那谷の秋 塚平幸子・長野

目標地點 高橋梨穂子・新潟

花びらの整列乱れてごみになるときの近づくブルーガーベラ
窓をあけておくには寒く窓をしめておくには暑い平凡なきよう
山があれば山を見つめるこんな日に目標地点のない空を見る
それはもう沸騰だらうというほどの動きを見せるケトルを止める
星のないプラネタリウムの静けさを胸いっぱいに吸いこんでいる
雨だけが目に見えているコンビニの駐車場にはぬばたまの夜

原賀 瓜子選

クマ史に残る 山口 明・新潟

「クマ捕つたら、瘦せてガリガリ」獵師いう秋なき山に冬がもう来る
熊鍋の会に次々出されたる脳みそ、熊の手心して食う

飢餓飢餓クマを襲いてヒトの世の無情のことば絶滅危惧種
ブナの実は地豆のごとく旨いぞと松野功氏教えたまいき

香ばしく栄養価高きブナの実の今年の飢餓クマ史に残る

今年まだ来ぬと柿の木を指す翁クマの山辺にヒトが住みおり



畠横を集団下校する子等のランドセルにも熊避けの鉛
滝の湯で滝を見ながら湯に浸かる梨の出荷はまだまだ続く
豚や牛食べるくせにと言われそうなれど能駆除可哀想すぎる
寝るところがあつて御飯が食べられてたまに旅行に行ける幸せ
和梨済み洋梨を獲るその前に夫にあわせて海釣りへ行く
柿積んだ軽トラ、道を行き交つて伊那谷の秋本番となる

一 望 辻 幾則 岐阜

白壁の町筋ありと訪ぬれど風のみ通る午後三時半

枕木と枕木の間の高き草風に揺れをり山陽の駅
いつのまにかローカル線の駅となり線路一本使はれずあり
予讃線の駅から十キロ山あひに大江描きし「谷間の村」あり
定食のみそ汁吾に甘かりき「お遍路さんにもよく言われます」
城山に登りて大洲を一望す川さへ時の止まれることし

卷 雲 藤川玲子・岐阜

どうしてもつかめなかつた空に浮く巻雲のようなあの日の言葉
限りなく夕陽に向かう椋鳥においてけぼりにされる氣のする
オリオンから冬の大三角をなぞる時指の間を風の抜けゆく
留守電に弱音吐きたるガサガサの声は入院二日目の母
左足を先に踏み出すこだわりで二秒静止し乗るエスカレーター
午後五時半西の彼方の夕映えを想像しつつ病院を出る

ひとつとびして

高山幸子*三重



七歳とともに七歳がレゴあそび七十年をひとつとびして

とめはねの注意をすれば「わがままを言わんといでよ」孫の反撃

烟草にあさつゆ光りいちめんにガラス細工の野のひろがれり
びかびかの山栗ひろい零余子つみ朝のウォークは今日も寄り道
ここよりは世界遺産の熊野古道ナンバンギセルに迎えられたり
峠への道ゆきの友は鳥のこえ木の実ふる音木の実ふむ音

恋

歌

伊東文弘 愛知

われは老いいのちの贊歌を歌ひたし野鳥の恋歌聴きつつ思ふ
わたり来て若葉のさくらに巣を編みしオオルリ鳥はこゑ清く啼く

雪消水増しにし川に婚姻色帯びる石班魚のくれなゐひかる
獵師らに護られ通ひし小学校疎開の子らに会ふ日なかりき
熊呼ぶと洪柿さへもみな伐りて柿の実あらぬふるさとの秋
わが友の撃ちにし熊の写真のる「さくま村報」を兄にいただく

小田部 雅子選

なんでだらう

三木裕子 愛知

連休の後の目覚めは重たくて職場放棄が頭をよぎる
真夜中に熱きココアを飲みながら腎臓癌の余命調べる

死ぬならば遺族年金くださいと頭をよぎるオペ説明の中
決心は今かもしけず病得た君の未来を背負ふなら今
ステージI 五年後再発二十パーセントよしとしようか一緒にゐよう
癌告知聞きしその夜の満月がなんでだらうと輝いてゐる

いま熱いです

瀬 尾 恵*鳥取

おしゃれには縁がなかつたいもうとのヘアアイロンがいま熱いです
「髪を巻くコツは小束に分けること」オトナたのしい姉妹の2000日
コーデーをかぶせて2分密やかに吹雪の夜がはじまるポット
湯気あがる紅茶へ息をふきかけて冷えた鼻とき溶けてゆくなり
ちいさな実つけた工ホバク庭先に晚秋の陽を集めてねばる
纖細な夫のこきげんあやしくてスマートウォッチのベルトを褒める

もつと遠くの

長石幸子・鳥取

アスファルトの間に伸びたる「ど根性ひまわり」咲いて猛暑果てたり

落差に惑う 武市尋子・徳島

斎場へのみどりの経路 風透る八女の台地にうねる茶畠
うづくまり肺返りをやり過ごす夜更け身ぬちに真水与へて

「父さんは帰らないよ、もう『玄関に寝そべり待てる猫に声掛け
遠き里より移したる野紺菊もつと遠くの夫に手向ける

階段を三つ飛ばしに下るよう夏から冬への季節の推移
三匹のメダカも家族「おはよう」と声かけわれらの日常のあり

夫逝きてまだ実感の湧かぬな話は全て過去形となる

撤退のコンビニあとの空間はひかりと闇の落差に惑う
冬菜植え作品展も終わりたりしみじみ受ける日向の温み

若きわがピアノに集う園児らが「どんぐりころころ」跳ねて歌いき

降る雨に草引きを止め午後の吾は眼凝らしてキルト刺す老い
書写山の式部の歌碑は摩耗して昏き木本群にこころの残れり

斎藤 档選

秋のとほりみち

藤井弘子・岡山

声の残像

豊田桂子・愛媛

カーテンの隙間にのぞく薄光ゆつくり満ちて白秋の朝

ふらいぱんに卵がいろいろ焼き焼けるまで朝のひかりはきれいなままで

吸ひ込みでけたたましき掃除機にまた思ひ知る小さな不覚

郵便屋のながくとどまる音とほく蜃気楼の海を見ることはなし

むき終へて光とかぜに渡すなら柿はオレンジ発光体に

ひとつぶの葡萄を口につぶすよりわが身は秋のとほりみちなり

姉のたましひ

阿野康子・山口

初冬の寝息

間城佐代・高知

死の近き姉に意識のなき二年吸入のふくろ膨れては曇る

あめつちに命あづけて眠りゐる姉は短く髪を刈られて

けふにして彼の世へと居を移したり病み深かりし姉のたましひ

晩秋の予定に埋まるカレンダー見をればわれに訃報届きぬ

さよならと秋に別れを告げることはらりひとひらコスモス散りぬ
川面へと光の影を残しつつ夕陽静かに闇に消えゆく
傑作の歌浮かびくる床の中メモに残せずことば散りゆく
公園の落ち葉踏みゐる靴裏にかすかに届く初冬の寝息

人生の一歩先など分からぬどまづは窓開け空気吸ひ込む
姉逝きし歳と重なるころとなりしきりに浮かぶ姉の笑顔よ

鈴木 千登世選

九 州 場 所 手 嶋 千 尋 * 福 岡

ふり向かず行く

福 島 登 美 熊 本

西新のミスドに力士が出現しドーナツ買っていく十一月
スエットの力士三人ドーナツのショーケース前ドーナツ選ぶ
南から入つたけれど右が「西」左が「東」の相撲会場
静けさの一瞬のあと立ち合いのぶつかり合う音そして騒然
玉鷲の右手が相手を押し返しぐうつと押してゆく九州場所
同僚の〈推し〉は呼び出し克之さん「ひがくし」と響きまろやか

天 主 の 鐘 垣 野 幸 一 * 長 崎

奄 美 丸

丸 山 克 介 鹿児島

明けそむる山の端うえに光る星「天主の鐘」のおごそかに響く
朝夕に響きわたれる鐘の音をききつつ暮らす街に住みいて
自転車をメタセコイアに立てかけて異国青年汗拭きにけり
白き猫しひあらわれ碑の前の献水桶の水飲みて去る
潮退きし川の浅瀬にうなだる鷺をしみれば孤独深まる
墓地内の墓標みめぐりわが胸に顕ちくる人らみなはるかなり

対 景 安 田 博 行 長 崎

若きころ対景図書き通過せし来島海峡とほくにのぞむ

煌々とさざ波ひかる安芸灘を夕日めがけて航くヨーソロー

あかき橋ふたつくぐりぬ清盛がひらいたせまき音戸の瀬戸の
江田島の大講堂や赤レンガときはの松も若き日のまま
構内を自由に移動できなくて組織去るとはかういふことか
この島をふたたび訪へる日のありやフェリー静かに小用をはなる

ながき世を土に埋もれし石棺に確かに残る人の手の跡
いにしへの朱の石棺に人はなくながき月日に消えてゆきしか
背後より枯葉追ひ来る気配ありふり向かず行く晚秋の道
いつの間に七十余年となる我が免許更新のハガキが届く
となり家に子の生まれしはわが夫の命日にして人には言はず
蜻蛉の群れとぶ中を歩みゆく迷惑な奴と思はれながら

かつて我が乗りたる船よ「奄美丸」太平洋に舳先向けたり
日焼けせし腕に抱へてお知らせの紙配りゐる島の区長さん
「農林課」の軽トラの男公園の草刈り終へて昼寝してをり
潮風に強きが故に我が島の海岸守るアダン茂れる
珊瑚なる石垣覆ふがじゆまるの枝元下校の児ら休みゐる
秋の日を山襞深くのみこみて桜島なほ煙を吐かず

☆ ☆